

助成年度：平成 23 年度

〔所属〕 北海道立総合研究機構 林業試験場

〔役職〕 主査

〔氏名〕 真坂 一彦

〔課題〕

「森林－養蜂業－農業のつながり」の実態についての基礎的研究

〔内容〕

養蜂業者の年間スケジュールにみる蜜源植物の利用と作業の内容を分析するため、養蜂家 167 名を対象にアンケート調査を行った（回収率は 55.7%）。その結果、養蜂業者は建勢（第 1 四半期）→ハチミツ生産と花粉交配（第 2 四半期）→ハチミツ生産（第 3 四半期）→建勢（第 4 四半期）のサイクルによって生業を成り立たせており、花粉交配作物は第 2 四半期が盛んであるが、イチゴの受粉に関しては通年で行われていることが推測された。花粉交配への従事が蜂群の成長に与える影響を評価するため、広島県三次市および北海道和寒町の蜂場において、花粉交配に従事した蜂群と採蜜用だけに使われた蜂群重量を比較した。その結果、花粉交配に従事した蜂群は有意に軽く、ほとんど成長できないことが分かった。なかには全滅した蜂群もあり、花粉交配はミツバチにとって死活問題になることが示唆された。ミツバチによる花粉源植物の利用実態について評価するため、ミツバチから花粉団子を採取し、花粉源植物を推定した。その結果、多くの場所・時期で 1 種ないしは 2～3 種の植物が花粉団子総数において優占したが、夏には 6～7 種が認められた。単花蜜目的の植物（ニセアカシア、シナノキ、トチノキ、キハダ、クローバー）のほかに、木本ではホオノキやイワガラミ、マタタビ属、クサギ、農作物ではソバ、花豆等のマメ科、カボチャ等のウリ科、ナス科、外来草本ではオオアワダチソウやフランスギク、オオハンゴンソウ、タンポポ属、ナデシコ科が確認された。